一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文の表記の一部を変えています。）

パラダイムという言葉を知っているだろうか。これは、クーンというアメリカの科学哲学者が言い出した①ガイネンで、「思考の②枠組」と理解していい。それが時代によって変わっていくのが、③パラダイム・チェンジで、極端に言うと、ある時代に「正しい」とされていたことが、「パラダイム＝思考の枠組」が変わると、「まちがった」ことになってしまうことがあるということだ。「天動説」から「地動説」に宇宙観が変わったのは、パラダイム・チェンジのもっともわかりやすい例の一つである。［④］、ある時代に「論理的」であったことが別の時代には「非論理的」になってしまうことがあるということだ。クーンはそういう⑤ジタイをパラダイム・チェンジという言葉で語ったのである。

最近国語力の低下が話題になっていて、文部科学省が「国語教育においては論理的思考の育成を⑥ジュウシする」という⑦趣旨のことを打ち出したという記事を読んだとき、ぼくはたいへん不安になった。と言うのは、文部科学省のお役人さんとか中央教育審議会の御用学者さんは、論理は一つしかないと思っているに違いないと思ったからだ。もしそう考えなければ、学校教育で「論理的思考」を教え込もうという発想自体が出てこないはずである。学校は「正しい」ことを教える場所だからである。

［⑧］、パラダイム・チェンジを視野に入れれば、「論理は一つしかない」とか「⑨論理は普遍的なものだ」といったことはないとすぐにわかるはずだが、彼らはたぶんいつも「正解」をいとも簡単に答えていた秀才さんのなれの果てだから、「正解は一つしかない」と思い込んでいるに違いない。［⑩］、「論理は普遍的なものだ」と思っているに違いない。

これは困ったことだ。現在の学問の共通理解では、「どの時代でも、どこの国でも、誰にでも通用する論理などというものはない」と考えるのが当たり前になっている。論理は時代につれて変わっていくものである。少なくとも、現在人文科学や社会科学の最先端をいっている研究者はそう理解している。もしそうでなければ、学問の変化や新発見自体が起こりえないことになってしまうだろう。

＊

「正しさが変わる」ということを、ぼくは人生の中で劇的に体験して来た。

ぼくが小学生だった昭和三十年代には「加工貿易」という言葉がさかんに使われていた。たとえば「社会」という教科では「日本は資源が少ないから、原材料を輸入して、それを加工して、他の国が真似できないような製品に仕立てあげて、それを輸出して発展する加工貿易の国だ」ということを、⑪耳にたこができるほど繰り返し繰り返し習った。日本には技術しかないというわけである。

実際、「社会」の教科書には工業地帯の写真が載っていたものだ。すごく背の高い煙突から黒い煙がモクモク出ている写真だ。これが日本の発展だ、これはすばらしいことだという趣旨の注キャプションが付いていた。ぼくは、そういう教科書で小学生時代を過ごしてきた。そこで、ぼくは「煙モクモク」はすばらしいことだと思い込んでいたのである。小学生のぼくにとっては、「煙モクモク」が「正しい」日本の姿だった。

ところが、中学の二年生になったとき、まるで突然のように公害問題が出てきた。ぼくにとって身近だったのが光化学スモッグだった。光化学スモッグはあの頃はじめて発生した。はじめは原因が不明で、たしか杉並区の小学校の校庭で夏に児童がバタバタ倒れてしまったのだ。それが、しばらくして大気汚染が原因だとわかってきた。そのほかにも、さまざまな公害が一気に「問題」になった。新聞やテレビで「公害」という言葉を見たり聞いたりしなかった日は、文字通りなかった。その後、オイル・ショックがやってきて、経済成長率十二・三パーセントが十年ほど続いた疾風怒濤の高度経済成長期が息の根を止められたのである。

その高度経済成長期の息の根が止められた後の時代になってみると、高い煙突から煙モクモクというのは「まちがったこと」になってしまったのだ。環境を破壊して、光化学スモッグの原因になる、ぜん息の原因にもなる。これはたいへんよくない。これからは環境を守ろう、自然を守ろう、そういう時代になった。いまは環境問題のキャッチフレイズは「地球にやさしく」だろうか。そうなると、ぼくが少年時代に習った「煙モクモク＝加工貿易＝正しい日本」というパラダイムはもうまちがいになってしまったのである。もっと言えば、「正しくない」ということになってしまったのだ。これはショックだった。「加工貿易ができなくなるとしたら、これから日本の先行きはどうなるのだろう」と、子供心に不安になったものだ。

⑫これがパラダイム・チェンジというものである。

先日タクシーに乗っていたら、道路の右手で林の木を伐採してマンション開発を行っているところを通った。ところが、道路の左手のマンションに横断幕が垂れ下がっていて、「木は一度伐ると再生に百年かかる」と書いてある。どうやら、左側のマンションの住人が、右側のマンション開発に反対しているらしい。これはもうほとんど住民エゴの典型的な構図だろう。左側のマンションの住人には、「あなたたちだって木を伐ってそこに住んだのではありませんか」と言いたいが、ぼくも郊外の丘陵地を切り開いて造成したニュータウンのマンションに住んでいるから⑬ほとんど同罪だろう。

こういう具合に木を伐り倒してマンションを建てると、その度に反対運動が起きて、新聞やテレビで報道される。そういう時代になったのである。いまは「開発は悪」であるかのような時代になった。ぼくが過ごした「開発は善」という少年時代と、「開発は悪」になってしまった現在では、世界観がまるっきり違う。繰り返すが、これがパラダイム・チェンジというものなのだ。

⑭、「地球にやさしく」するために色々な工夫が奨励されるようになった。ゴミは分別して出しましょうとか、牛乳パックはよく洗ってスーパーに戻しましょうとか、スーパーのビニール袋はやめて自分で買い物バッグを持って行きましょうとか、そういう話になってきた。「開発が悪」となってゆくと、世の中がすべてがそういうシフトになっていくのである。

スーパーができはじめた頃は、ビニール袋がもらえるからいちいち買い物かごを持って行かなくていいし、買いだめもできるから便利だとしか思っていなかっただろう。牛乳パックがスーパーで売り出された頃は、毎日届けられる牛乳瓶を洗って返す手間が省けるし、好きな分量を買ってこられて、しかもポイッと捨てられるからこれは便利としか思っていなかっただろう。それがどうして牛乳パックを返さなければいけなくなったのかというと、「開発は善」から「開発は悪」へとパラダイム・チェンジしたからである。ぼくたちにとって、パラダイム・チェンジはこういう具体的な形として現れるものだ。

（『未来形の読書術』石原千秋）

注　キャプション・・・写真の説明文。

問一　傍線部①・②・⑤・⑥・⑦の片仮名を漢字に、漢字を平仮名に直しなさい。

問二　傍線部③「パラダイム・チェンジ」とあるが、筆者はこの言葉をどのように説明しているか、文中から五十字以内で抜き出しなさい。（句読点や記号は字数に入れます。）

問三　□部④・⑧・⑩・⑭に当てはまる言葉を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。（同じ記号を二回用いてはいけません。）

ア　そこで　**イ**　しかし　**ウ**　つまり　**エ**　だから　**オ**　ところで

問四　傍線部⑨「論理は普遍的なものだ」とあるが、筆者は「論理」をどのようなものと考えているか。文中から十五字以内で抜き出しなさい。（句読点は字数に入れます。）

問五　傍線部⑪「耳にたこができる」の意味として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　何度も同じ話を聞かされて怖くなった　**イ**　何度も同じ話を聞かされて悲しくなった

ウ　何度も同じ話を聞かされてうんざりした　**エ**　何度も同じ話を聞かされて混乱した

問六　傍線部⑫「これがパラダイム・チェンジというものである」とあるが、文中の＊印の部分にあげられている具体例を、筆者が小学生だった時と中学生だった時の違いが分かるように、文中の言葉を使って、八十字以上百字以内で説明しなさい。（句読点や記号は字数に入れます。）

問七　傍線部⑬「ほとんど」と同じ働きをしているものを、次の**ア～エ**の〰〰部の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　大型スーパーマーケットはほとんど完成した。

イ　朝から気分が優れないのでほとんど食べていない。

ウ　彼女はほとんど泣き出さんばかりの状況であった。

エ　ほとんどの町民が駅前の再開発の計画に反対した。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文の表記を一部変えています。）

今から二年前の夏。八月も終盤に差し掛かったある日のことだ。二週間に及んだジュニアの代表合宿を終え、①地元・白馬に戻ってきた岡野真琴は、自分を取り巻く空気が微妙に変化していることを敏感に感じ取った。

鈍重な雲に空が覆われたその日、オフだった真琴は小中学校時代の恩師である高倉に声をかけられ、妙高高原で行われた中学生の注1サマージャンプ大会を見学にいった。

そこで「やぁ、真琴くん。こんにちは」と親しげに挨拶（あいさつ）してきたのは、鳥居健吾（とりいけんご）だ。真琴より四つ年下で、当時まだ中学一年生だったスクールの後輩である。

「おお、健吾か。なんだよ。お前。また少し背伸びたか？」

「へへへ。めちゃくちゃいっぱいご飯食べてるからね。早く真琴くんと同じ大会で飛ばなくちゃって」

「生意気言うなよ。ついこないだ泣きそうな顔をしてスキー辞めたいって言ってたくせしやがって」

「ちょっと、もう。古い話はやめてよね。それよりもどう？白馬中央高校、新しい監督が来たって聞いたけど……」

健吾はケラケラと笑いながらよくしゃべった。こんがりと焼けた肌に白い歯が映える。数年前に高倉から紹介され、オリンピック競技場ではじめて顔を合わせたときの注2屈託はどこにもない。

健吾はかつての自分を見ているかのようだった。幼い頃（ころ）から高倉によって徹底してスキーの基礎をたたき込まれたこと。物心ついた頃には周囲の期待を肌で感じていたこと。「天才」などという②手あかのついた表現で持ち上げられてきたこと。

自分の力に③カジョウなくらいの自信があって、だからこその挫折（ざせつ）を経験したことまで一緒だった。きっと今は多くの重圧から解放され、④すべての歯車がかみ合ったような成長の途上にあるに違いない。この手のタイプは一つ間違えれば大化けすることを、真琴は身をもって知っている。

「調子いいんだってな。高倉さんから話は聞いてるよ」

「うん。調子はいいね。今はスキーが楽しくて仕方がない」

「そうか。中学生レベルじゃ敵なしって感じか？」

やはり自分の経験になぞらえて、真琴はなんの気なしに尋ねてみた。このときは当然だがまだ心に余裕があった。いくら成長のただ中にいるからといって、健吾とは身体が違うし、経験が違う。何よりも積み重ねてきた練習量がまったく違う。健吾になどに負ける要素が見つからなかった。そもそも同じ土俵にいるという感覚さえなかったくらいだ。

健吾は⑤ほうけたように口を開き、すぐにうっすらと目を細めた。

「全然だよ。中学生になってからはもうほとんど勝ててない。注3ラン付きのコンバインド（複合）では勝てることもあるけど、とりあえずジャンプじゃ勝ったことがまだないよ」

そう言うわりには、健吾の表情は柔らかかった。首をかしげた真琴に、当然とばかりうなずいた。

「いや、だって。必ず上にハルがいるからさ」

健吾は微笑んだままゆっくりと振り返った。そこにすらりと背の高い、天然パーマのかわいらしい男の子が立っていた。

「はじめまして。上原春です。健吾から真琴くんの話はよく聞いています。」

真琴は虚を突かれる思いがした。ハルと呼ばれた少年を見て、真琴はたしかに一瞬「男の子」と感じた。想像していた風体とまったく違う。もっと筋肉質で、⑥無骨な人間をうわさから勝手にイメージしていた。

しかし、語り口調はずいぶんと大人びていて、かわいい笑顔に隠されてはいるものの、視線も中学生とは思えないほど鋭く見える。真琴の身体つきを確かめたいのか、ハルは全身をなめ回すように見つめてくる。

「あ、ああ、お前がハルなのか。おれの方もたまに話を聞いてるよ。すごくバランスのいいジャンプをするんだってな」

⑦真琴はことさら「バランス」の部分に力を込めた。真琴の差し出した右手を、ハルも笑ったままつかみ取った。その瞬間、二人を囲む大人たちのざわめきが大きくなった。「うわ、新旧スターの対面だ」などという子どもの声も聞こえてくる。真琴は全身の血がたぎるのを感じた。ちょっと待て。その「旧」の方がおれなのか？決して声には出さなかったが、頬（ほお）は自然と引きつった。

ハルはたしかに見るからに全身にバネを秘め、細身ではありながら、体幹のしっかりした身体をしていた。しかし、真琴のつた

えたかったのはそういうことではない。簡単にすべてを認めていい相手ではないと察したのだ。

額にねっとりとした汗がにじんだ。つい最近まで小学生だった相手を表現する言葉としてふさわしくないかもしれないが、真琴はハルに飲み込まれそうな⑧を覚えた。若い選手にありがちな、たとえば自分が身にまとっていたような虚勢とは異なる。健吾のようなわかりやすい⑨とも違っている。確固とした実績に裏打ちされたベテラン選手のような⑩が感じられたのだ。

握りしめた手に思わず力がこもった。ハルが顔をしかめていることに、真琴はしばらく気づかなかった。

「まぁ、見てなって。真琴くん。きっと驚くからさ」

健吾が⑪挑発的な口調で二人の間に割って入った。ハルは不思議そうな顔をしつつも、真琴に律儀(りちぎ)に頭を下げ、ゆっくりと注4きびすを返す。まだ線の細い背中を、健吾は記憶に刻み込むように見つめていた。

いざ競技が始まると、真琴はすぐに見学する父母の楽しげな表情の理由を知った。息を飲むようなビッグジャンプを⑫ヒロウしたのはハルだけではない。同じ白馬北中の土屋誠一郎と田辺秋人という二人の一年生も、そろって美しいジャンプを決めた。彼らが力強くテイクオフするたびに、そこかしこで⑬カンタンのため息が漏れ、歓声が上がった。自分の子どもはそっちのけで、まるでこれを見に来たと言わんばかりの笑顔があふれている。

健吾のジャンプもまた、以前見たときよりも余計な力が脱(ぬ)けていて、無駄のない洗練されたものに思えた。決して失敗ジャンプではなかったはずだ。しかし、一本目を終えた時点でぶっちぎりのトップはハル。以下、誠一郎、秋人と続いて、健吾は四番手に沈んだ。もちろん風の影響などもあるのだろうが、負けず嫌いの性格を思えば腸(はらわた)が煮えくり返っているに違いない。真琴はそう想像したが、当人は注5意に介した様子をまったく見せず、「さぁ、もう一本。もう一本！」などと大きな声で周りを注6鼓舞している。

途中から小雨が降り始めた悪天候の中、真琴のとなりにいた高倉がネタを明かすように解説してくれた。

「お前と健吾はたしかによく似たタイプの選手だけどな。でも、⑭健吾にはお前にないものが二つあるんだ」

真琴はボンヤリと恩師に目を向け、息を吐いた。なぜか不快な思いが瞬時に芽生えた。高倉の方は笑いをかみ殺せないといった

表情だ。

「切磋琢磨（せっさたくま）できる仲間の存在。というよりも、ハルの存在か。認めざるを得ないライバルが身近にいるっていうのは大きいぞ。健吾を見ていると痛感するよ。ハルと出会ってからの成長は段違いだ」

「もう一つは？」

「うん？」

「いや、僕にないもう一つのものってなんですか」

ハルの話題を断ち切りたい一心で、真琴は続きを求めた。高倉は一度口をすぼめたが、当然のように言い放った。

「それは良い指導者に恵まれているっていうことだ。お前の時代はまだ中学生も俺が教えていたんだもんな。申し訳なく思うくらいだよ。注7良三さんはすごいよ。感覚がまったく衰えていない。いまだに新しい理論を吸収しようと貪欲（どんよく）なんだ。確たる自分なんて必要ないというくらい競技や自然に対して謙虚だよ。」

憧れの選手について語る子どものように、高倉は熱っぽくよくしゃべった。「良三さん」が誰（だれ）なのか、面識はないが真琴にはわかっていた。北中の選手が飛ぶときにコーチボックスに立つ白髪の老人だ。

（『春、風まとう』早見和真）

注1　サマージャンプ大会・・・スキーのジャンプ競技を冬の本番に先立ち、初戦として夏に行われる大会。

注2　屈託・・・物事にこだわり、くよくよすること。

注3　ラン付きのコンバインド（複合）・・・クロスカントリーとスキージャンプとを組み合わせて競う種目。

注4　きびすを返す・・・引き返す。

注5　意に介した・・・気にかけた。

注6　鼓舞している・・・励ましている。

注7　良三さん・・・ハルや健吾たち中学生にスキージャンプを教えている、ベテランコーチ。

問一　傍線部①「地元・白馬に戻ってきた岡野真琴は、自分を取り巻く空気が微妙に変化していることを敏感に感じ取った。」とあるが、岡野真琴が感じている自分を取り巻く空気の微妙な変化の具体的な内容を説明した次の文章の空欄部A～Dに当てはまる言葉を、文中から抜き出しなさい。

サマージャンプ大会では、健吾たち中学生がそろって美しいジャンプを決め、見学している父母たちの［A］が上がり、［B］があふれていた。また、子どもたちは真琴とハルが一緒にいる姿を見て、「［C］」などと言っている。今はもう、真琴ではなく、［D］がスターとして注目を集めていた。

問二　傍線部②「手あかのついた表現」・④「すべての歯車がかみ合った」・⑤「ほうけた」の意味として最も適当なものを、後から選んで記号で答えなさい。

②　手あかのついた

ア　添削されて意味が変わった　　**イ**　何度も推敲（すいこう）され工夫された
ウ　多くの人に使い古された　　**エ**　時代遅れで古風な

④　すべての歯車がかみ合った

ア　すっかり身軽になり、あらゆることが気にならなくなった
イ　食い違いがなくなり、あらゆることが順調に進みだした
ウ　全速力で走りだし、あらゆることが急速に進みだした
エ　着実に積み重ねて、あらゆることが変化しはじめた

⑤　ほうけた

ア　ぼんやりした　　**イ**　すっかり夢中になった
ウ　やる気をなくした　　**エ**　何かを思い出した

問三　傍線部③・⑥・⑪・⑫・⑬について、片仮名は漢字に直し、漢字は平仮名に直して書きなさい。

問四　傍線部⑦「真琴はことさら『バランス』の部分に力を込めた」とあるが、なぜ真琴はことさら「バランス」の部分に力を込めて言ったのか。その理由に当たる一文を二十五字以内で抜き出して書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問五　空欄部⑧～⑩に当てはまる最も適当な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。（同じ記号を二回用いてはいけません。）

ア　余裕　　**イ**　威圧感　　**ウ**　生意気さ

問六　傍線部⑭「健吾にはお前にないものが二つあるんだ」とあるが、高倉が考えている、健吾にあって真琴にはない二つのものを文中の言葉を使って、二十字程度で一つ、十五字程度で一つ書きなさい。（句読点は字数に入れます。）

問七　本文の内容に合うものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　高校へ進学し代表合宿を終えて地元白馬に戻ってきた真琴は、良三さんと言う新しいコーチの出現によって中学生の中から新しいスターが誕生することを予感していた。

イ　真琴の後輩の健吾は、ハルというすばらしいライバルの出現によって大きく成長したが、同時にいくら努力しても越えることのできないハルの存在にいら立っていた。

ウ　真琴は、健吾やハルに出会い、ハルをはじめとして後輩の中学生たちが次々とビッグジャンプを決めていくのを間近に見、高倉コーチの話を聞いて心が動揺していた。

エ　高倉コーチに声をかけられ、真琴がやってきた妙高高原に詰めかけていた父母たちは、中学生たちのはげしい戦いを目の当たりにして、圧倒され息を飲んでいた。

オ　高倉コーチは、真琴の成長のために、ハルの存在や良三の指導を受けて成長目覚ましい後輩たちの姿を見せたいと思い、真琴を妙高高原での大会に誘った。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文の表記を一部変えています。）

注1筑紫（つくし）に、なにがしの注2横領使（あふりやうし）などいふやうなるものありけるが、注3土大根（つちおほね）を万（よろづ）にいみじき薬（くすし）とて、朝ごとに二つづつ焼き（よくきく）
て食ひける事、年久しくなりぬ。ある時（とき）、①館（たち）の内に人もなかりけるひまをはかりて、敵襲（かたきおそ）ひ来（き）たりて囲み攻めけるに、館のうちに（長年に）
②兵二人出（い）で来（き）て、命を惜しまず戦ひて、皆③追ひかへしてけり。④いと不思議に覚えて、「⑤日ごろここにものし給ふとも見ぬ（おいでなさるとも思われない）
人々の、かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「⑥年ごろ頼みて、朝な朝な召しつる土大根らにさぶらふ」といひて（召し上がっていた）
失（う）せにけり。

⑦深く信（しん）をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ。（このような神や仏の恵みもあったのであろう。）

（『徒然草』第六十八段　兼好法師）

注1　筑紫・・・九州。
注2　横領使・・・地方で、反乱の鎮圧や盗賊の討伐に当たった役人。
注3　土大根・・・大根（だいこん）。

問一　傍線部①「館の内に人もなかりけるひまをはかりて」・④「いと不思議に覚えて」の主語を、それぞれ文中から抜き出しなさい。

問二　傍線部②「兵二人」とは何者か。文中から漢字三字で抜き出しなさい。

問三　傍線部③「追ひかへし」を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問四　傍線部⑤「日ごろ」・⑥「年ごろ」の意味として最も適当なものを、後から選んで記号で答えなさい。

⑤「日ごろ」　**ア**　ふだん　**イ**　何日間も　**ウ**　いつの間にか　**エ**　この数日　**オ**　近頃

⑥「年ごろ」　**ア**　年齢　**イ**　一人前の年齢　**ウ**　何年間も　**エ**　相当の年輩　**オ**　この一年間

問五　傍線部⑦「深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ。」について説明した、後の文の空欄部**A**～**C**に当てはまる言葉を、文中からそれぞれ指定した字数で抜き出しなさい。

筆者は、警護の人数の少ない横領使の館に敵が侵入したのを、突然現れた兵士二人が撃退したのは、**A**（三字）が、**B**（三字）を何にでもよくきく**C**（一字）だと信じ、毎朝二つずつ食べ続けていたという信心の深さのお陰であると考えている。

このページには問題はありません